

令和 4 年 6 月 21 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17H02246

研究課題名（和文）東アジアにおける家族とセクシュアリティの変容に関する比較史的研究

研究課題名（英文）Comparative historical research on varying families and sexualities in East Asia

研究代表者

小浜 正子（KOHAMA, Masako）

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：10304560

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 14,100,000円

研究成果の概要（和文）：東アジアの家族とセクシュアリティの特徴と変化を明らかにせんとする本研究の結果、中国前近代における家族について、唐代の女家での婚姻儀礼や近世の母子間の気の継承観念などから、従来漠然と考えられていたよりも母系的な要因が強いこと、儒教的な家族規範の実態は時代や地域による格差が大きいことなどが明らかになった。

また、現代東アジアのセクシュアリティについては、セックスワーカーやセクシャルマイノリティの運動がそれぞれ地域の政治的・地政学的状況を踏まえて展開されており、そこでは強力な家族主義や政治的抑圧との対抗関係など、欧米における運動とは異なった状況があることが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、東アジア内での家族とセクシュアリティの比較史であり、従来、欧米とアジア個別の地域との比較に終始しがちであったジェンダー史研究を、アジア内部での比較史に重点を置いて進めることにより、儒教文化圏内部の共通性と相違とをより深く考察することが可能になった。その結果、東アジアの家族の母系的要因と父系化について、比較の視座から考察することによって従来の単線的な理解が修正されつつある。また、現代東アジアのセクシャルマイノリティ運動の展開を地政学的要因を踏まえて考察することにより、日本の運動の展開過程とその立ち遅れの要因を東アジアの国際的視野の中で理解することが可能になる。

研究成果の概要（英文）：Based on our studies on the characteristics and changes of families and sexualities in East Asia, we clarified the fact that families in the pre-modern times of China had more matrilineal factors than previously thought, especially when they held a marriage ceremony at the bride's house in the period of the Tang dynasty and they had the concept on inheritance of qi (energy) from mothers to children in the early modern period, and the fact that actual practices of Confucian family norms often differed depending on periods and regions.

As for sexualities in the present East Asia, we found out that sex workers and sexual minorities have developed their movements under the situations differing from those in the Western countries, in accord with the political and geopolitical conditions in their regions under the strong influence of familism, and have built adversary relationship with political oppression.

研究分野：アジア史、ジェンダー

キーワード：東アジア 家族 ジェンダー セクシュアリティ セクシャルマイノリティ 父系制 家父長制

1. 研究開始当初の背景

本研究グループなどのこれまでの研究によって、中国前近代における家族とセクシュアリティについて、中国の家族は先秦から基本的に父系制であったが、歴史的に徐々に父系化の度合いを強めてきたこと、中国の相続制度の特徴である男子均分相続を原理的に説明しうる思想は朱子学以後にしか出現しないこと、明清の流動的な競争社会の中で、ジェンダー規範は社会的地位の指標として重視されるようになったこと、などが明らかになった。また、近現代中国においては、ナショナリズムとの関連の下で、男性性・女性性のあり方が変化したなどのジェンダー秩序の変容が見られることがわかった。

以上のように、中国の家族とセクシュアリティの歴史的变化と特徴の概略が明らかになってきたが、いまだ詳細な具体的状況は明らかでなく、また他のアジア諸地域についてはまだあまり研究が進んでいなかった。

2. 研究の目的

本研究では、第一に、儒教的とされる東アジア各地域の前近代の家族規範の具体的特徴と、それがどの程度、どのように普及していったかの実態と、その要因を、各地域の社会状況に即して明らかにする。

第二に、男女の身体の統御と家族の再生産のあり方に注目する。女性の生殖能力の統御を通じた家族の安定的な再生産に前近代から国家が果たした役割の大きさはこれまでの研究でも注目されており、我々も近現代におけるリプロダクションをめぐる国家と家族の関係の分析に成果を挙げてきた。これをさらに深めて、現在、世界で最も少子化の進んだ地域である東アジアのリプロダクションを規定する要因を、各地域の歴史的背景および政策と女性の主体的対応の相関の下で解明する。

さらに、異性愛家族の形成維持をはかる政策と表裏のものとして、セクシャルマイノリティーズや独身男性、あるいはセックスワーカーなど家族の外側の人びとが如何に捉えられてきたかに注目し、東アジアの家族と親密圏について、新たな角度から光を当てる。

3. 研究の方法

文献研究とフィールド調査を併用して、研究を進めた。ジェンダー研究においては、新出史料の発掘とともに従来から使われてきた文献史料のジェンダー視点による読み直しが重要である。また、これまで資料を残すことが少なく、声を上げられなかった人々の声を聞きとるフィールド調査も不可欠である。

本研究組織は、歴史学・文学・社会学などの多様なディシプリンの研究者よりなり、こうした異なった専門性を持つメンバーの分析の成果を生かした議論を通して、従来見過ごされていた東アジア社会のジェンダー秩序を明らかにし、それを発信してゆく。

4. 研究成果

本研究の成果は、成果報告論文集である(小浜・板橋編 2022)をはじめとする各著作に示されている。明らかになったことは、以下のような点である(括弧の著者名は、同報告論文集での執筆者名であり、研究協力者も含まれる)。

(1) 東アジア前近代の家族について、とくに中国の父系制家族に関しては、唐代の女家での婚姻儀礼や近世の母子間の気の継承観念などから、従来考えられていたよりも母系的な要因が強く見えること、それは父系制が強化されると言われていた近世期まで見うけられることがわかった(下倉、佐々木)。また、中国前近代における儒教的な家族規範である「同姓不婚」や妻妾間の地位の移動などに関する時代や地域による実態の格差などが明らかになった(五味、板橋)。こうした儒教的規範の実態のバリエーションについては、中国以外の地域に関して、研究を継続中である。また、中華人民共和国成立直後の現代中国の家族については、大衆運動への関与を通じて主婦も国家への貢献を求められており(泉谷) 国家による家族への強い関与が見られたことは前近代と同様に特徴的であったと言える。

(2) 現代東アジアのリプロダクションに関して、近年の生殖補助医療の適用範囲について、東アジアで婚姻内の異性愛夫婦のみに使用を限る家族主義的な傾向が強かった(姚)。さらに、冷戦体制下にあった現代東アジアの最前線の韓国や台湾における覇権的男性性には、生殖可能な身体であることが重要な条件である(福永)など、(男系の)血統を繋ぎ子孫を残すという儒教的な価値観が、現在も大きな影響を持っていることが確認できた。

(3) さらに、現代東アジアのセクシュアリティについては、セックスワーカーやセクシャルマイノリティーズの運動がそれぞれの地域の政治的・地政学的状況を踏まえて展開されており、そこでは強力な家族主義や政治的抑圧との対抗関係など、欧米における運動とは異なった状況があることがわかった(郭、遠山)。セクシャルマイノリティーズの社会的包摂が東アジアで最も進んでいる台湾では、家族主義的価値観によるバックラッシュとともに、支配的な異性愛規範に適合的な「新しいホモノーマティビティ(同性愛規範)」が登場し、それに対する批判も見られる

ようになっている（白水）など、より複雑な状況も見られる。

なお、これまでの研究の成果をまとめた『中国ジェンダー史研究入門』（小浜等編、京都大学学術出版会、2018）の英語版および中国語版（Masako & Grove eds.2021、小濱等編、2020）を刊行して多元的な研究成果の国際発信を行えたことは、コロナ禍における国際的研究交流として、特に記しておきたい。

<参考文献>

・小浜正子・板橋暁子編『東アジアの家族とセクシュアリティ 規範と逸脱』京都大学学術出版会、2022年。

・Kohama Masako, Linda Grove eds., *Gender History in China*, Kyoto:Kyoto University Press & Melbourne: Trans Pacific Press, 2021.

・小濱正子・下倉渉・佐佐木愛・高嶋航・江上幸子編『被埋没の足跡 中国性別史研究入門』、国立臺灣大學出版中心、2020年。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 小川快之、仁藤智子	4. 巻 24
2. 論文標題 東アジアの宮廷女官をテーマとした日本史・東洋史合同授業の教育的効果について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国土館史学	6. 最初と最後の頁 35-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小浜正子	4. 巻 14
2. 論文標題 「高校歴史教育改革とジェンダー主流化」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『ジェンダー史学』	6. 最初と最後の頁 59-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 下倉渉	4. 巻 5
2. 論文標題 「「招魂葬議」攷 『通典』所掲礼議試釈・その1」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『日中韓周縁域の宗教文化』	6. 最初と最後の頁 1-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 佐々木愛，大澤正昭，石川重雄，戸田裕司	4. 巻 14
2. 論文標題 「江西省歴史調査報告 宋代古墓を中心として（吉安・撫州篇）」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『社会文化論集〔島根大学法文学部紀要〕』	6. 最初と最後の頁 21-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小浜正子	4. 巻 16
2. 論文標題 「『官商快覧』から『国民快覧』へ - 中国近代のマニュアルブック」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 (学習院大学外国語教育研究センター) 『言語・文化・社会』	6. 最初と最後の頁 45-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 下倉渉	4. 巻 708
2. 論文標題 「馬王堆漢墓出土の「喪服図」をめぐって 秦漢時代の親族関係に関する若干の考察」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『歴史と地理』	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐々木愛	4. 巻 79-1
2. 論文標題 「「父子同気」概念の成立時期について - 「中国家族法の原理」再考」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『東洋史研究』	6. 最初と最後の頁 35-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐々木愛	4. 巻 18
2. 論文標題 「朱熹『家礼』における家族とジェンダー 特に女性の儀礼参加をめぐって」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『社会文化論流』	6. 最初と最後の頁 91-106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 下倉渉	4. 巻 65・66
2. 論文標題 「「拜時」「三日」婚攷(中) 『通典』所掲礼議試釈(その2)」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『歴史と文化』	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 下倉渉	4. 巻 12
2. 論文標題 「「拜時」「三日」婚攷(上) 『通典』所掲礼議試釈(その1)」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『アジア流域文化研究』	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 泉谷陽子	4. 巻 24
2. 論文標題 「中国における「歴史虚無主義」批判 - 方方「軟埋」と「歴史決議」」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『国際交流研究』(フェリス女学院大学国際交流学部紀要)	6. 最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件(うち招待講演 1件/うち国際学会 5件)

1. 発表者名 佐々木愛
2. 発表標題 中国家族法の原理再考 思想史の見地から
3. 学会等名 明清史夏合宿2019
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 泉谷陽子
2. 発表標題 人民共和国建国前後の土地改革運動 - 河南省許昌専区を中心に
3. 学会等名 日中国際シンポジウム「東アジアにおける戦時動員の位相」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 上田貴子
2. 発表標題 戦後大阪神戸における山東幫の生存戦略 山東系中華料理店のビジネスモデルを中心に
3. 学会等名 日本華僑華人学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小浜正子
2. 発表標題 中国の人口政策
3. 学会等名 比較家族史学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 下倉渉
2. 発表標題 「東漢建初四年《序寧簡》補説」
3. 学会等名 楚文化与長江中游早期開發国際學術研討会（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 下倉 渉
2. 発表標題 「《通典》凶礼議初探」
3. 学会等名 礼学与中国伝統文化国際學術研討会（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yoshiyuki OGAWA
2. 発表標題 Court Ladies and Gender from the Song Dynasty to the Qing Dynasty
3. 学会等名 22nd Annual Asian Studies Conference Japan（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 上田 貴子
2. 発表標題 「日本人の見た奉天、中国人の生きた奉天」
3. 学会等名 東洋史研究会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小浜 正子
2. 発表標題 「大学における男女共同参画の現状と課題」
3. 学会等名 日本薬学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 下倉 渉
2. 発表標題 「関羽の生日」
3. 学会等名 第三回楚文化国際学術研討会 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Akiko ITAHASHI
2. 発表標題 Revenge and Chastity: Women Pretending for Resistance in Medieval China
3. 学会等名 Gender and Medieval Studies (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 小浜正子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 391
3. 書名 一人っ子政策と中国社会	

1. 著者名 梅村卓・大野太幹・泉谷陽子編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 252
3. 書名 『満洲の戦後 継承・再生・新生の地域史』	

1. 著者名 小浜 正子、下倉 渉、佐々木 愛、高嶋 航、江上 幸子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 486頁
3. 書名 中国ジェンダー史研究入門	

1. 著者名 小浜 正子・板橋 暁子編、小浜正子・白水紀子・下倉渉・佐々木愛・板橋暁子・五味知子・泉谷陽子・小川快之・上田貴子他著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 402
3. 書名 東アジアの家族とセクシュアリティ	

1. 著者名 Kohama Masako, Linda Grove eds.	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Kyoto: Kyoto University Press & Melbourne: Trans Pacific Press	5. 総ページ数 515
3. 書名 Gender History in China	

1. 著者名 小濱正子、下倉渉、佐々木愛、高嶋航、江上幸子編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 《被埋没の足跡--中国性別史研究入門》	5. 総ページ数 527
3. 書名 國立臺灣大學出版中心	

1. 著者名 荒川正晴編（下倉渉「交拝する夫妻」pp.293-311）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 311
3. 書名 『岩波講座 世界歴史6 中華世界の再編とユーラシア東部 4～8世紀』	

1. 著者名 荒川正晴・富谷至編（佐々木愛「中国父系制の思想史と宋代朱子学の位置」pp.25-274）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 295
3. 書名 『岩波講座 世界歴史7 東アジアの展開 8～14世紀』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐々木 愛 (SASAKI Megumi) (00362905)	島根大学・学術研究院人文社会科学系・教授 (15201)	
研究分担者	上田 貴子 (UEDA Takako) (00411653)	近畿大学・文芸学部・教授 (34419)	
研究分担者	小川 快之 (OGAWA Yoshiyuki) (10400798)	国士舘大学・文学部・特別任用教授 (32616)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	五味 知子 (GOMI Tomoko) (20751100)	聖心女子大学・現代教養学部・講師 (32631)	
研究分担者	泉谷 陽子 (IZUTANI Yoko) (20773485)	フェリス学院大学・国際交流学部・准教授 (32711)	
研究分担者	板橋 暁子 (ITAHASHI Akiko) (30837290)	東京大学・東洋文化研究所・助教 (12601)	
研究分担者	下倉 渉 (SHIMOKURA Wataru) (40302062)	東北学院大学・文学部・教授 (31302)	
研究分担者	白水 紀子 (SHIROUZU Noriko) (10196628)	横浜国立大学・大学院都市イノベーション研究院・教授 (12701)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 明清史夏合宿2019	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 「東アジアはどこまで『儒教社会』か？ チャイナパワーとアジア家族」	開催年 2021年～2021年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関